

道徳教育と人格の尊厳

—“自由なる応答性としての責任”の現代的課題—

清 水 宏 子

I 小 序

現代という時代は、今までよりも一層人間に高度な道徳性を要請しているといえるのではなかろうか。ガブリエル・マルセルは「技術は、我々がそれを使う使い方に応じて存在する。あるいは、より正確に言えば、使い方に応じて意味をもつ。」⁽¹⁾⁽²⁾と言ったが、人間の技術が高度化すればするほど、その扱い方如何によってそこから引き出される効果的な結果に対しての人間の責任はより大きくなるのである。

今から約25年位前にマルセルがハーバードで行なった“人間の尊厳”に関する講義の中で、「今日の人間が直面させられている技術化の道を突進している世界において、人間の尊厳ということに関して起こりつつあることを知ること」は「極めて重要で、憂慮すべき問題」⁽³⁾であると述べた。その問題とは「…われわれを脅かしつつある技術文明の危険と非人間化」⁽⁴⁾のことで、次のように言っている。

「ドイツの哲学者、グンター・アンデルスが、その『廃棄された人間』Gunther Anders: Der antiquierte Mensch. München: Beck, 1956. で明察したように、人間はますます自分を自分の技術で作ったものに関係させて考えるようになり、全く不思議なパラドックスによって、自分の技術が完成した余りにも正確で、あまりにも完全な機械に較べて、自分自身を低く評価するようになるということとは本当のことです。こうした異常さは、サミュエル・バトラーがその《エル्यूオン》Erewhon の中で述べたような予言的な展望の線上にあるものです。そしてそうしたことは測り知れない倫理的な結果を引き出さないはずがないでしょう。何故ならこのような自己評価、むしろ自己卑下は、古典的な哲学—久遠の哲学 (philosophia perennis) といってもよいでしょうが—が肉体にたいする精神に付与したような超越性を根本的に否定することになるからです。現実⁽⁵⁾に精神にとって代ろうとしているものは、多少とも技術主義的な、ある種の働きという観念であります。」

このマルセルの憂慮は日1日と現実化し、今日、人間性とその尊厳についても、現代的状況の中での再確認が必要とされて来ているのではなかろうか。

最近の日常のマスコミの情報からも知り得ることであるが、科学技術の進歩は地球上の世界を狭いものとし、諸民族の生活は物理的に接近した。また工業の発展は近隣庶民生活に企

業による組織的影響を及ぼし 情報網の発達はかつて一般の人々が知り得なかった世界にまで入り込む可能性を与えた。人間の生活に便利な機械道具の発明は人間を日常の雑事から解放する一方、逆に人間が機械によって生活を左右される時代に入って来た感さえもある。人間の生死を支配する力を持つ医学・生命科学の進歩発展等、世界の科学技術が進歩すればする程、地上の人類の生活は一層複雑化し、その最新の科学技術の高度な知識の把握は、世界人類の幸せと存続を人類みずからの手で脅かすものとさえなっている。

この現代的諸状況に内在する人類にとっての危機感を反映してか、1984年の夏の第12回上智大学人間学会の基調講演は「生命を考える—生命科学の立場から—」というテーマで、上智大学生命科学研究所の青木清教授によって行なわれ、その終りに教授は、科学者としての立場から「生命倫理」⁽⁶⁾の確立の必要性を訴えられた。

そして同じ年の10月、筑波大学で行なわれた日本倫理学会第35回大会の共通課題は「技術と倫理」であった。大会第二日の午前の部では東西の「技術の倫理」をめぐって個人発表があり、午後の部では「現代技術の根本問題」をテーマとしてシムポジウム⁽⁷⁾が行なわれた。倫理学以外の分野からも諸教授の参加を得て交わされた多彩な議論は、我々人間の今後の生き方歩み方についての現代的諸問題の在り処を明らかにし、貴重な多くの示唆を与えるものであった。

このような時にあたって、人間が今、その人間の尊厳に基づいて責任ある行動をとるよう自覚を促すと共に、次の時代を担う筈の青少年の道德教育が単に外形的なものではなく、人間の本来の志向性にそった、責任ある自由な自律的能動的行動主体を養成するものでなければならないことを訴える必要性を痛感せざるを得ない。言いかえれば、現代社会に生きるものとして、時代の状況を知りつつ、何かしらの形で世界人類の幸せのために積極的に貢献し得るような道德的能動的資質を備えた人格の養成が期待されるのである。必要なのは、自己の権利を主張して社会から受けることだけを待つ人間ではなく、僅かでも持っている力を出し合ってより善い社会の建設に尽くす善意と実行力ある人間である。何故なら、現代に生きる人間は社会の成り行きを静観しているだけではすまされない。地上の破壊か建設かという両極の間で揺れ動きながら、機械的秒よみの中で善悪を分別し、敏速かつ主体的に正しい生き方の取捨選択を決断し実践すること、これこそ自由ある人間に課された現代的課題だからであり、その自由に地上の将来が委ねられているとも言えるからである。

「このような危険について警告すること。同時に、技術の進歩に酔いしれてきたエッセ歴史哲学と対決し、俗流に抗して『本質的なもの』あるいは『変らざるもの』を守り抜こうとする果敢な努力にもとづくあらゆる試みを推進すること。私に言わせれば、哲学者にとって、これ以上の急務はない。」⁽⁸⁾

「…避けることのできないものだからとて、そのまま、それを受け入れるだけでは十分ではない。ここでも、はっきり見わけることと分析が必要である。そして、おそらくこの分野においてこそ、自由についての考察が絶対に不可欠である。」⁽⁹⁾

とマルセルは、その著書の「日本版のための序」の中で述べ、実際に当時の彼の著作活動の努力は、その人間性の危機の警告に費された。

私は今この小研究の中で、このマルセルの英知による警告と、その他の現代の諸学者の深い思索に光を得ながら、“創造主なる神への応答である道德”と“応答性としての責任”と、またそこに本質的にかかわりのある“自由”等の問題を考えながら、現代的諸状況の中で現代に生きる者としての道徳的在り方・歩み方の根本を僅かながらでも探りたいと願っている。

道德という言葉をきくと、一見規範主義的な固い印象をうけがちであるが、実はヨゼフ・フックス教授の説にもある通り、道德こそは、人間の本性にそった超越者の呼びかけに対する人間の側の主体的な“応え”であり、そこにあるのは神と人との絶えざる対話であり応答⁽¹⁰⁾であって、人間は生涯を通してその呼びかけに心の深い所で応えつづけてゆくのである。⁽¹¹⁾

したがって、現代に生きる我々人間に要請されていることは、複雑な世界的諸事情の中で道德の真の応答性を更に厳密に生きてゆくことである。それは、現代の我々各個人の応答のあり方如何に世界人類の将来がかかっているからであり、今あらたに人間の尊厳が根本的に問われている時だからである。

Ⅱ 道 徳 と 責 任

現代の人間はある面で（勿論1部の人間にはあるが…）道徳的にかなり無責任になって来ているという印象をうけることがある。特に、日頃の個人的人間関係においては立派な道徳的常識を備えていると思われる人ですら、ある種の状況のもとにおかれると、責任性を意識しないかの如き言動に陥ることがある。それは特にその行為が不特定多数を対象としている場合とか、あるグループ（個人的または組織的な）として事がなされる場合などに、この道徳的責任性を喪失したかのような状況が起っているのではなからうか。

最近の話題としては、人体に有害な不凍液入りワインの売買の件によって国際的道德的信頼関係がゆらいだ。しかし、これに類する道徳的無責任な行為は日本国内にも諸所に散在した。有毒排水、有害薬品、有害廃棄物、危険な環境破壊など…。その他、他人の不幸に対する傍観者の態度—これは現代の学校における“いじめ”の問題にもつながるが—、特に海外アジアの貧民や難民に対する日本人の消極的姿勢は、人道的無責任として世界諸国から多くの批判⁽¹²⁾を浴びた。

このような現象の奥には、道德と責任という面からみて、どのような問題が潜んでいるのであろうか。

先ず日本人の“責任”という語の理解のしかたを考えると、ごく一般的には“義務的な負担”として受け止めていることが多いようである。⁽¹³⁾しかし“responsibility（責任）”という概念は元来西洋で発達して来たもので、しかも時代的にはかなり新しいもののようであ

る。今道友信著の『東西の哲学』⁽¹⁴⁾に次のように記されている。

「責任すなはちレスポンサビリテにあたる概念を表はす古典的な術語は、あれほどすぐれた道徳哲学、倫理学、倫理神学等を築き上げていた西洋の伝統を調べてみても、その古典期にも、中世期を通じて、近世哲学に於いてすら、見る事ができない」⁽¹⁵⁾

しかしそれは責任の事実がなかったということではなく、ソクラテスをみてもその後のヨーロッパの歴史をみても一たとえば初代キリスト教徒の殉教など一見事な責任の果し方があったといえる。ただ、責任という概念が西洋で重要視されるようになったのは、現代、二十世紀の実存哲学に至ってであったということである。⁽¹⁶⁾

この西洋の responsibility の訳語として“責任”という語が日本で使われはじめたのは現代であるが、日本人はその内容として、obligation, duty, liability と理解した。日本に古くからあった語としては、「責め一人に帰す」⁽¹⁷⁾（責任は結局ひとりの主権者に帰着する）という表現があり、その使い方には、悪い結果に対する義務的負担の意味が強い。そしてその意味内容が、現代の responsibility の日本語訳“責任”にそのまま移行されたと思われる。

ところが、西洋における責任としての responsibility の本来の意味は別のところにあった。平凡社発行の『哲学辞典』⁽¹⁹⁾によれば、責任（responsibility）とは「一般にある自発的な行為を原因として、その行為者におわされる意識もしくは責務、制裁」を意味するのであって、自発性は責任遂行上の大切な要素と考えられており、これは西洋の多くの哲学者に共通する所⁽²⁰⁾のようである。

そこで、一般の日本人の受けとめ方による「責任」すなわち「義務的な負担」を果たすこと一それは自分に課された仕事に対する忠実さであり与えられた仕事に対するその人の態度が問題とされる一と西洋的理解と比較してみる時、“責任”の概念のとらえ方に本質的な差異があるようである。

responsibility の語源はいうまでもなくその動詞形 respond（西語 responsabilidad-responder, 伊語 responsabilità-rispondere）であって、いわゆる“応答する”ことである。この応答性については前に掲げた『東西の哲学』の中に興味深い一節⁽²¹⁾があった。それによれば、昔、仮面を被った役者たちがその演劇の中で相呼応することを respondere（とよみあふ）と言い、そこから responsabilité（応答性、責任）という単語が生じて来たという。そしてまた、人生を劇になぞらえれば、そこには社会的役割による他人との相互の呼応と同時に、人間としての創造主に対する垂直的呼応性（responsabilité）も顧慮すべきで、「人生を考へると、人格としての『ペルソーナ』と応答性としての『責任』の二つを大切にしなければならぬ。」と述べている。

『The Century Dictionary Volume IV』⁽²²⁾によれば、responsibility（責任）とは先ず、「The state of being responsible, accountable, or answerable」（応えうる状態）である。通常“責任者”は“a responsible person”，“責任ある地位”は“a responsible post”とい

うが、ここに出てくる“-ible”という語尾は、動詞の語根に添えてそのことの可能性を表現するから、そこから“a responsible person”をその語の元来の意味から解釈すれば、“応えることのできる人”，すなわち事柄の大小をとわず，問いかけまたは呼びかける者に主体的自発的応答をする可能性を自ら，または与えられて持つている人が“a responsible person”すなわち“責任者”なのであって，他の人に尋ねなければ答えられない依存的従属的状况や立場にある人はその事に関しては responsible ではない。「responsible（自己の能力・管轄・権限の範囲内のことに対して）責任がある⁽²³⁾（answerable, accountable）」という説明とも合致する。いいかえれば、『新倫理学事典』でも述べているように，責任性は先ず⁽²⁴⁾応答性にあるといえる。

このようなあり方の“責任”を道徳との関係において考えてみると，まさに人ひとりひとりはその本性からくる倫理的神の呼びかけに対して，その決断と実践を通して生涯応えつけてゆくように招かれているものであり，道徳はその応答的人格的行為のうちにあるのだから，各自が主体的にその道徳的行為にかかわっている限り，各人はその道徳的行為の responsible（応答可能者としての責任者）なのである。何故なら，常にその主体が responsible として応答性の所持者であり自己の行為の先行者であると認識する限り，その意味で主体は「主体として，知りつつ自由に全体にかかわり，そのように自己を所有している」⁽²⁵⁾人格的存在として，自己の実現した道徳的行為の全体に一はじめからおわりまで一かかわっているからである。

こうして，真の道徳的行為には，常に同時に厳密な意味での応答性における道徳的人格の責任があるということになる。

ところで，このように考えてきた“道徳と責任”の問題を現代的諸状況の中においても一度考えてみる時，この項目の最初にふれた不特定多数を対象とした場合の現代人の道徳意識と責任性の稀薄さは，この“応答性”という事とかかわりがあるように思われる。

つまりここに，科学・技術の高度化に伴う時代の急速な変化という現代的状況の中での倫理的に注目すべき問題点のあることが，前述の日本倫理学会第35回大会にゲストとして参加された今道友信教授によって指摘された。教授は，「実体として人間にかかわる対面倫理」と「見えざる不特定多数の隣人を相関者とする遠隔倫理」とを区別し，次のように言われた。

「従来の倫理学は多少とも対面倫理を基礎とするものであります。……しかし人間の環境が自然的なものに近く，近間にある人間が倫理的な関係にたちいるというのではない状況，たとえば電話などで遠くの人を脅かすことや遠くの人に救いを求めることができるというような状況を考えますと，隣人概念もすっかり変わってまいりまして，隣人というのはその顔も知っていて声も知っている人というふうな概念とはちがうものとなります。今は不特定多数の隣人が技術媒体を介してあるという時代でございますから，遠隔倫理と対面倫理とのパースペクティヴの使いわけということもしていかなければならないのではな

いかというふうに考えられます。⁽²⁶⁾」

こうして、かつての社会生活においては殆んど考えることも出来なかった「見えざる不特定多数の隣人」についての道徳的応答性が、日毎に現実味をもつて現代人たる我々に迫って来ているのである。この遠隔倫理も、対面倫理も、道徳的応答性としての責任の基礎はいずれも同じく人間としての主体にあるが、たしかに遠隔倫理はその実践面において、現代の世界状況が我々人間に投げかけた新しい道徳的課題であり、多くの人に途惑いを感じさせている点でもあろう。応答は呼びかけによつて生じてくるものであるが、遠くの、技術的媒体を通しての不特定多数の隣人を、未だすべての人々が己とかかわりある隣人としての十分な認識点に到達し得ないほどの、技術による空間と時間の接近の早さ、時代の変化の急速さが、人間の本性的呼びかけの敏速な把握をおくらせ、その応答性をにぶらせているといえるのではなかろうか。そしてここに、時代状況に応じて必要とされる道徳教育の一つの課題を示されているように思う。

同じ大会においてつづいて今道教授が、倫理学における「実践的推論式の構造の逆転」⁽²⁷⁾という問題をとりあげられたのは非常に興味深い。

それは要約すれば次の通りである。

アリストテレスの『ニコマコス⁽²⁸⁾の倫理学』に基いて言うと、古典的な倫理学の推論式は

目的定立としての 大前提

この目的を実現する手段としての 小前提(一)

(この手段は複数に列挙される)

この手段についての考察・判断としての 小前提(二)

決断としての 結論

であるが、これはあくまでも自分が目的をたててその手段を自分で選ぶという対面倫理の領域におけるものである。ところが現代の状況においては、技術的手段の優位という事情により大前提と小前提の逆転がおこっている。つまり、大前提として特定の非常に強力な手段が我々の手の中にある。小前提としてはこれによって達成可能な複数の目的が列挙される。こうして我々は、手段ではなく目的を選ぶことを迫られており、しかもその時の決断の主体は、私ではなく我々であって、つまり共同責任のとりかたの問題がここに出てくる、という説である。

そこで眼を世界に向ければ、現代の状況は、複数の人間による、不特定多数の人間に対する重大なる行為の決断が、共同体の主体性のある応答性をもって実現されねばならない機会をつぎつぎと提供している。こうして道徳における応答性としての責任が、時代状況の中で、かつてよりも更にグローバルな形で人類全体に切実に求められているのである。

しかもこの人類共同体的応答は決して各個人の責任としての応答性を抹殺してしまうもの

ではなく、むしろそれを基礎としてはじめて成り立つものであることを思うとき、各人が人間としての根本に立ちかえって、あらためて人間の応答性としての責任の意味を深く自覚する必要がある、現代という状況の中で強く求められていることを認識しなければならないのではなかろうか。

Ⅲ 責任と自由

「大部分の哲学者は、責任性の基礎が意志の自由にあるという点で一致している」⁽²⁹⁾と言うが、カール・ラーナーは次のような表現で責任と自由とのかかわりあいを説明している。「自分自身の成り行きを任せられているという在り方において、人間は、自分の責任を取るべき自由な存在として自分を経験する。」⁽³⁰⁾その自由とは「一つの全体的実存遂行における、一つの全体的な主体にかかわる自由」⁽³¹⁾である。

すなわち、前項において、人格的応答性に道徳的行為の責任の根源があると述べたが、この応答性に妨げがあればその妨げの度合に応じて行為の主体としての責任は減少することになる。そして、妨げはいろいろありうるが、中でも特に主体的応答性と根本的なかかわり合いのあるのが“自由”の欠除なのである。それはカール・ラーナーの言い方を借りて言えば“自分自身の成り行きを任せられていない”という在り方の経験であるといえよう。

責任としての応答性は前にも述べたように、主体的自発的行為によって実現されるべきものだから、その自発性にとって自由は不可欠の条件である。通常の職場においても責任者は“a responsible person”といわれる通り、“yes”か“no”かに拘らず応答の如何がその立場に委ねられている、言いかえれば自発的応答がその人の自由な主体性にゆだねられている範囲においてその人は応答が可能（responsible）なのであって、その範囲内で責任の主体であり得るといえるし、一方、成りゆきについての応答の自由がゆだねられていない者は応答不可能（no responsible）なので、自由がない事に関してその人は責任の主体ではあり得ないということになる。

ここに責任と自由との大切な関係があるのだが、人が責任ある者であるためには自発的応答を可能にする自由が前提とされる、というよりむしろ、責任と自由とは一つであるということである。こうして或る行為が人の自主性に基く自由な決断によって遂行されるとき、人はその行為について、その起りと結末をも含めて責任を負うことになる。そして自由の中に自律と自発性が生まれ、より豊かな応答性を可能にする、それが responsibility（いわゆる“責任”）の本来の意味である。束縛からくる依存と従属は、それが心理的であれ、物理的であれ自由と主体性の欠除であり、応答性を否定することとなる。

日常の人の行為が責任性を保つには自由が必要であるから、ましてや善悪にかかわる道徳的応答の行為においてその行為者の責任を問うには、先ずその行為の前提に自由があったかどうか問われるのが当然である。そこに自由が認められるときはじめて人格的行為が成立し、賞罰に値する行為とみなされ得る。言いかえれば、道徳的行為のはじめの段階での主体

的応答の可能性（responsibility）が、その結末たる賞罰に対しても応答性をもって相対するのを可能にし、よきにつけ悪しきにつけ、主体としての自己にかかわることとして受け入れさせる、これが道徳的行為に対する責任である。ある道徳的行為が、己にかかわる、人として当然なすべきこととして自由な応答を迫られていると内的に意識する時、それは道徳的責任性であり、その内的呼びかけに自発的に呼応し、決断し、誰にも強制されずに遂行する時、そしてその結末を己れのこととして背負う時、道徳的責任を果しているといえる。

こうして、カール・ラーナーが「真の自由において、主体は常に自己を意図し、自己を理解し、自己を実現する。」⁽³²⁾と述べたように、自由こそ道徳的主体性と自律性の実現を可能にするのである。

すなわちresponsibility（応答性としての責任）を望むなら、先ず“自由”であること、言いかえれば、行為主体を束縛し得る内的外的あらゆる状況からの解放によって、自発的応答可能（＝responsible）な状況をととのえることが大切である。それは物理的・精神的あらゆる束縛の状況からの解放を意味していることは言うまでもない。特に内的自由が十分に整えられた時に、人は創造主なる神の呼びかけに澄んだ心をもって正しくresponse（応答）してゆくことができる。これが、法にも縛られず、感情にも慾情にも左右されず、義務感にもひきずられることのない、創造主の呼びかけに対する純粋な応答としての道徳的行為である。そこには、応答としての行為の遂行に当たっての人格的主体性・自律性・自発性が存すると共に、その行為の結果に対しても完全な応答性（responsibility＝責任）が存在する。いわば、道徳的行為の全過程に自由なる応答性としての責任は生きているのである。

ここからわかることは、自由の大切な役割は単に人を束縛から解き放つことではなく、創造主なる神への誠実なる応答可能の場を備え、人間の尊厳にふさわしい決断と遂行をもって人生の道を崇高に真実に歩みうるよう人を促すものであるということである。それをカール・ラーナーは「…主体的自由の真の本質は、人間の生における個々の諸行為や出来事に対して、それらが可能であるための条件として先行するものである。」⁽³³⁾と説明した。その自由にあって、人は応答性としての責任を終始もつのであって、自由についての解釈の誤謬は、同時にその道徳生活に（道徳の人類普遍性という面から考察する時）内的に奥深いところで根本的に重大な影響を及ぼすものである。

こうして、責任とは“自由なる応答性”を意味するものであり、我々人間は創造主なる神の人類への普遍的道徳的呼びかけに、各人が人格的に自由に応答してゆくことを求められているのであるが、では、この我々人間の主体性の本質にかかわる、責任性の基礎である自由は、簡単に我々人間が手にし得るものであろうか。

ガブリエル・マルセルは、⁽³⁴⁾「存在論的秘義」というテーマで語った時、その中で次のように述べている。

「自由への唯一の入り口は、主体の自己自身についての思索であります。そういう思索が、本来的にいえば私は自由であり、自由は私に与えられた属性ではなく、むしろ私は自

由であるべきであり、つまり自由は獲得さるべきものであるということを、私に発見させたのです。⁽³⁵⁾」

その後「兄弟愛と自由」⁽³⁶⁾というテーマの中で更に説明して言った。

「まず私に非常に大切だと思えることを述べてみましょう。それはわれわれの中の何びとも厳密な意味で、私は自由だということはできないということです。……中略……自由を一つの属性と考えるほど宿命的な誤りはありません。私は自由とは正にその反対だといいたいのです。むしろさらにわれわれ一人一人が自分を自由な人間にすべきであり、前に述べたような、自由を可能にする構造的な条件をできるだけ利用すべきだといわなければなりません。他のいい方をすれば、自由とは一つの獲得物一つねに部分的で、つねに不安定で、つねに争われる一なのです。ここで私が先に希望についていったのと全く同じように、自由が生まれるのは捕囚の状況の中においてであり、まず解放されることの憧れとして生まれることを見逃さないでください。⁽³⁷⁾……」

つまり、本来的に人間が享受すべき自由は、それは同時に人間にとっては創造主からの招きであり、マルセルは、現在捕囚の状況にある人間が、その招きに応じて自ら絶えず努力して獲得してゆくべき性質のものであることを強調している。それは現代の恐ろしいほどの技術時代の中で避けがたい人間機械論の見方、人間の物化・商品化という非人間化の傾向、社会的病気等に捕われつつある状況において、人間が一つの機能ではなく一つの存在であること、技術を超えた精神的存在であること、又だからこそ、そのような捕囚の状況からの人間の解放とそのための努力の必要性を、又未来への警告を彼はすべての人類に真剣に訴えているのではなかろうか。

マルセル自身が述べているように、「人がわれわれ各人に、あなたは自由ですかと尋ねた場合に、われわれが感じる当惑」⁽³⁸⁾を思えば、彼の「自由とはつねに部分的で、つねに不安定なちとるべきものでしかありえないのですから。」⁽³⁹⁾という言葉が更に理解できよう。そして、それにも拘らず、我々人間は自由であるべき存在として超越への招きを自由に受諾してゆくことを求められているという所に、我々人間の、“自由なる応答性としての道徳的責任性”があるのであって、自由の欠除が我々に、この内的志向性としての道徳的責任性を免除することにはならないというパラドックスに到達するのである。

以上をふまえてここで、前項にとりあげた現代的状況における責任の問題にも一寸触れておかねばならない。それは、今道教授が「実践的推論式の構造の逆転」⁽⁴⁰⁾について述べられた時に言われた“共同責任”の問題である。

すなわち、前にも一寸触れたように、現代の共同体的責任において迫られる道徳的応答性は、同じく共同体的自由を前提とする筈である。共同体的自由とは、単なる個人的自由のプラスでないことは言うまでもない。むしろその共同体に属するすべての人間の自由が十分に

尊重された時にはじめて認められる性質のものであり、そのような状況においてはじめて、共同体的主体的応答性としての責任性が生きてくるのであり、その時に共同体の各個人は、共同責任の一端を主体的に背負ったと言えるのである。しかし、各共同体が完全な自由を享受しているとはとても言い得ない現代の世界的社会的政治的状況の中で、人類はさまざまな形で抑圧を受けていることは否めない。自由をはばむのは暴力である。そして科学技術の進歩にまぎ込まれた現代社会での暴力は、しばしば組織的で非物理的な、いわば、責任の人格的主体が目に見えないロボットの暴力が増えて来ているのではなかろうか。機械の部品化された人間が、組織または共同体の責任という名のもとに事を成し、その恐るべき結果に対して人々が、自己の責任性を忌避するとしたら、それはその共同体に、そしてそのメンバーの各個人に真の意味の自由の欠除を如実に物語っているといえる。そして事柄が重大であればある程、自由の欠除からくる真の人格的主体的応答性としての責任のない決断が共同責任という名のもとになされるとしたら、地上の破滅は遠くないと感ぜざるを得ない。

大なり小なり、それぞれの人が何らかの組織に属して行動しているという現実、社会の組織化がますますひろがりつつあるという現代の状況の中で、ここにも、道徳的主体性のある真に人間らしい共同責任のとり方という、人間の尊厳にもとづく道徳教育の必要性が現代的課題として提示されているのではなかろうか。それは先ず、人類にとって創造主からの招きともいえる本来的自由、そのあるべき姿の獲得に向かっての絶えざる努力からはじまらねばなるまい。その努力はひ弱なものではなく精神的たくましさが必要とする。そして先ず第一に各人の自己の内部に向けられるべきものである。何故なら、責任の主体は外に探すべきではなく自己の内にあるものだからである。

「技術は、我々がそれを使う使い方に応じて、存在する。あるいは、より正確に言えば、⁽⁴¹⁾ 使い方に応じて意味をもつ。」と言ったマルセルの言葉の重みと共に、高度な技術社会にある我々人類の自由にゆだねられている部分の大きさと重みと意味を充分にかみしめてみる必要がある。

Ⅳ キリスト教的道徳と自由なる応答性としての責任

キリスト教的道徳では、これまでに述べて来た自由なる応答性としての責任ある生き方が最も顕著に要請されているといえる。

キリスト教的道徳は、基本的には言うまでもなく、宗教的道徳である。ということは、唯一の神の存在を信じるものとしてその垂直関係の中に人の道のあることを認めるものである。が、これは人を新たに特殊な状況の中に組入れることではない。むしろ人の本来もって生まれた人間性が神に向って開かれたものであり、永遠の神の計画と創造の業によるものであることを認め、素直にそれを神のみ手より受けて、その本性を最も人間らしく生きてゆこうとすること、そこにこそ人の道があり、それを生きることが神の創造の意図に沿ったものであることを認めるものである。これがまたカール・ラーナーの言う「被造性⁽⁴²⁾の受容」でも

ある。神の創造の意図の中に人間に対する神の愛と命令とを認め、またその神の命令は人間の存在そのものの中にあり方として刻み込まれている、言いかえれば、道德的自然法は神の意向の表われであり、この神の意向に主体的に應えてゆこうとすること、この自由な応答性のうちに道德があるとする。解放された人間の理性が欲情にまどわされずにこの道德的自然法を正しくよみとる時、そこには普遍的な人の道が示される。これが絶対超越たる創造主の人間への呼びかけであり命令でもある。そして、被造物にできることまた必要なことは、ただ受入れること、すなわち“人はかくあるべし”と実存が叫ぶ在り方そのものの受容でしかない。それに逆らうことは人間性を否定し、人間の尊厳を放棄することである。その呼びかけに自由なる決断によって主体的に respond=“応える”ことが道德であり、各人の責任における人の道の遂行なのである。それは、誠実なる神の呼びかけに対する人間の側からの誠実な応えであり、人はその存在そのものの中に神の呼びかけを受けているので、言わば実存的にそれに応えてゆくのである。すなわちキリスト教的道德は、人の本性が普遍である如くすべての人類に差別なく及ぶものであり、その自然法においてすでに、すべての人の応答性を期待しているのである。

しかし、キリスト者にとっては、神の呼びかけはこの普遍的道德的自然法によるもののほかに、啓示としての神のことばがある。⁽⁴³⁾

旧約時代には、神のことばは太祖や予言者たちを通して人類に伝えられたが、新約時代に至ってはキリストに於いて神の奥義が示された。⁽⁴⁴⁾そして神の本質が愛にあることが明らかにされた時、それは同時に神の人類に対する呼びかけが愛の呼びかけであることが明示されたのである。⁽⁴⁵⁾こうして人々は、人類にとっての神の掟や律法が人の外側の形だけで応えるべきものではなく、その心と魂とで応えるべきものであることを悟らされたのである。律法の実践は、文字で表現されている事を形式的に厳守することよりも、旧約時代には殆んど忘れられていたその掟の文字の奥にある本来の心が大切であって、⁽⁴⁶⁾律法はそれによって完成されるべきこと、それが“愛の掟”であり、しかもその愛の掟は他のすべての掟にまさることをキリストは教えたのである。⁽⁴⁷⁾⁽⁴⁸⁾⁽⁴⁹⁾

したがって、キリスト教道德に欠かすことのできないのは、法の文字に縛られることなく、法を越え時代と場所を越えて、あらゆる人定法の根底を支える筈の絶対者なる神の真の意向にレスポンス（応答）しようとする姿勢である。それは、時と場合によっては人の置かれた状況によって、文字に表現された掟または上司の命令とは異なる決断と遂行もあり得ること一たとえば迫害時代のクリシタンの殉教は時代と洋の東西を問わず、現代においては基本的人権に基づく正義と自由を望む人々の声など一をも意味するものである。しかしこれが、⁽⁵⁰⁾“状況の倫理”と同一でないことは、キリスト者には道德的内的原理がキリストにおいて明らかであることからわかる。

ここにキリスト者としての「神の子の自由」が、⁽⁵¹⁾重大な意味をもってその道德的行為にかかわってくる。

前項において、「自由の大切な役割は…、創造主なる神への誠実なる応答可能の場を備え、

人間の尊厳にふさわしい決断と遂行をもって人生の道を崇高に真実に歩みうるよう人を促すものである」と述べたが、ここに至って「神の子の自由」は、単なる可能性の場をつくるだけでなく、更に積極的な姿勢を意味しているものであることが明らかになる。

キリスト者にとっては人の道は、単に道徳的自然法による実存的事実であるのみならず、超越絶対者による啓示的“愛の掟”⁽⁵²⁾でもある。したがって自由とは、道徳的实践遂行の妨げからの単なる解放であるよりも、むしろ神の愛への強い愛着、又は絶対超越なる神との深い内的一致であり、カール・ラーナーの「自由とは…主体が自らの在り方を委ねられていることである」⁽⁵³⁾という言葉は、人間の本来の絶対超越者への志向性の完成を意味するもので、迷いとか選択の余地のない境地へと人々を導いてゆくものである。そして、これこそが真の意味の解放であり、「兄弟愛に富んだ人間はその隣人に結びついています。しかしそれはその結びつきの絆が彼を縛りつけるところか、彼を解放するという意味においてであります」⁽⁵⁴⁾といったマルセルの言葉の意味もここにあるといえよう。それは絶えざる神の意志との一致であり、神の呼びかけに対してはその人の魂の深奥に内在する神なるキリストが呼応する、という応答性であり、このキリスト者としての最高の境地を使徒聖パウロが体験的に表現したのが、次の有名な一句であった。

「生きているのはもはやわたしではなく、キリストこそわたしのうちに生きておられるのです。」（『新約聖書』ガラテア人への手紙2の10）

ここに至ってはもはや、あらゆる法も掟も権力も人を支配することはできない。⁽⁵⁵⁾しかしその自由な行為は常に神の創造の意図に沿って、神に根ざす人の道を完全に遂行してゆくことになるのである。これが、キリスト者にとっての道徳的内的規律の完成である。

キリスト教的道徳の目指す完徳とは、このような自由な愛の応答性（リスボンサビリティ）をもってキリストの生涯にあやかることであり、それは、これまでの2千年の歴史の中で、多くの聖人・殉教者等によっても世界各地で証明されて来た。しかしそのような特別な人々による特別な機会での崇高な徳の実践以前に、我々の平凡な日常生活の中でごく普通に出くわすひとつひとつの行為の中にも、善悪に関する人の道の歩み方については同質の応答性、いわば道徳的責任を問われていることを忘れてはならない。ただしこれは人間に、外側から見える道徳的行為の完全性を要求するものではなく、人間の限界からくる弱さと欠点を充分に理解する愛と憐れみに満ちた御者への愛の応答であり、それは絶えざる回心⁽⁵⁶⁾という形⁽⁵⁷⁾によっても表現し得る、神に向かって歩みつける人の、生涯を通しての応答であるといえよう。

こうして、キリスト者の神に対する“自由なる愛の応答性”としての道徳的責任は、現代という、より複雑な社会的状況の中で、キリストの光によって、福音的かつより具体的に、現代人の歩むべき道を明らかにしてゆくことが求められているのである。それはまさに人

が、超越に開かれた存在として、現代社会の捕囚的状況の中でそれらを超えたメタの世界を探究してゆくこと、すなわち人の本来的あるべき姿にたちかえり、技術的に高度化した人間社会の中で揺れ動く人間性を、超越性において深めることによってその基礎をかためることであり、そうすることによって高度なレベルでの人間性の両極のバランスが保たれるのではなかろうか。その点については、前掲の日本倫理学会における今道教授の次の発言が、現代の人間社会の歩み方の傾向に対しての重要な警告を意味しているように思われる。

「…フィジカの時代にメタフィジカが必要であったように、そしてメタフィジカなしには結局は倫理学はできなかったのですが、テクニカの時代にメタ・テクニカというものを考えていかななくてはならないと思います。」⁽⁶⁰⁾

“自由なる愛の応答性”としてのキリト者の道德的責任性は、この超越の世界に生きるようすべての人々を招いているとも言えよう。

V む す び

道德を、自由なる応答性としての責任という面からここまで問いつづけて来て、今また改めて、その本来の大テーマである「道德教育と人格の尊厳」に戻って少し考えてみる時、人格の尊厳が、マルセルの哲学にも示される通り、人間の本性的な神（この宇宙の絶対超越的存在としての）への志向性⁽⁶¹⁾にあり、またそれこそ神から受け神に根ざした人間の本性の芽生えであることを考えるとき、道德教育の重要なポイントはその周辺にあるのではないかと考えざるを得ない。

『技術と倫理』の“まえがき”に、勝部教授は次のように記した。

「分子生物学の登場によって今や生命現象も物質現象として物理・化学の言葉で説明可能となった。日本人は遺伝子工学にも深入りしてゆくと思われるが、『生命の尊厳、人間性の尊重も今や空虚に近い概念である』との坂本教授の発言はここで特に重要である。」⁽⁶²⁾

これこそまさに、今から約24年前にマルセルが感じていた、技術の完成による人間の精神の喪失⁽⁶³⁾という危機感が現実化しつつある状況を感じさせるといえるのではなかろうか。そしてこの人間性への疑問の投げかけに対して、前項に掲げた今道教授の“メタ・テクニカを考える”という発言がなされたのであるが、それは上述のような今日的状況の中で、人間が人間であるための、ある種の根本的な道を示唆されているといえよう。

この“メタ・テクニカ”という語は、すでにマルセルが1961年にその講演の中で精神の働きを説明して使用している。

「…潜心や、それから生まれてくるすべてのものは、超技術的 *méta-technique* であり、あらゆるかけひきに反対する放下というものを含んでいるということでもあります。」⁽⁶⁴⁾

科学技術の高度化という状況の中で、人として、人らしく生き残るためには、その状況に比例するだけのメタ超越の世界への探求と深化こそ重要な意味を人間にもたらしてくれるのではなかろうか。ゆえに、このメタの世界に十分な基礎を置く時にはじめて、更に具体的な道德教育を考えてゆくことが可能になるといえる。

すなわち道德上の事柄に関する豊かな知識は人間の判断の働きに光を注ぎ、善の決断と遂行を援けるので、その知的教育も大切である。が同時に、道德的行為の最も重要なポイントは、絶対超越なる神への志向性にもとづく善意の主体的な遂行にある⁽⁶⁵⁾のだから、その育成に全力をつくすことこそ道德教育に欠かすことのできない重要な点であり、自由なる応答性としての責任の概念も、この主体性があってはじめて生きてくるものである。

現代の道德教育にとって大切なことは、とかく一部の教科に片寄った知的詰め込みを重視しがちな日本の教育に、根本的な配慮とバランスが欠けていたことに気づき、現代的諸状況の中で、人間のありのままの姿を見直すことである。そこから、真の知育が何であるかが明らかにされるであろう。教育は人間のためであって、人間が教育のためではないことを認識し、マルセルの「人間であるということ。人間としてとどまり続けること。」⁽⁶⁶⁾という言葉の意味を改めて考えてみねばならない。

現代日本の青少年の非行の多様化と多発は、教育にあたる親や教師にむかって、現代的諸状況の中での今の教育のあり方に重大な警鐘をなりひびかせているともいえよう。

〔註〕

- (1) Marcel, Gabriel (1889~1948) キリスト教の実存主義の立場からサルトルの無神論の実存主義に対抗した哲学者・文学者である。
- (2) マルセル著作集 8『人間の尊厳』（春秋社、1973）中の「常識の衰退」（1958）の一節、p. 23 参照。
- (3) マルセル著作集 8『人間の尊厳』（春秋社、1973）中の「第九講 危機に瀕する完全性」の一節、p. 202参照。
- (4) マルセル著作集 8『人間の尊厳』（春秋社、1973）中の「日本版のための序」の一節、p. 5 参照。
- (5) マルセル著作集 8『人間の尊厳』（春秋社、1973）中の「第九講 危機に瀕する完全性」の一節、p. 204~p. 205参照。
- (6) 「バイオエシックス」という言葉の日本語訳で、10年ほど前から青木清教授がその研究を提唱している。
- 日本倫理学会編『技術と倫理』（以文社、1985）p. 204~p. 205参照。
- (7) 日本倫理学会編『技術と倫理』（以文社、1985）の p. 196~p. 222参照。
- (8) マルセル著作集 8『人間の尊厳』（春秋社、1973）中の「日本版のための序」の一節、p. 5 参照。

- (9) 同上 同頁参照。
- (10) ローマ教皇庁立 グレゴリアン大学教授。倫理神学担当。
- (11) 清水宏子「道徳教育と人格の尊厳」(『人間学紀要 第14号』上智大学人間学会, 1984, p. 86～p. 108) p. 94参照。
- (12) 犬養道子『人間の大地』(中央公論社, 昭59) p. 41～p. 43参照。
- (13) 『日本国語大辞典』(小学館, 昭57)によれば「①責めを負ってなさなければならない任務。引き受けてしなければならない義務。②事を担任してその結果の責めを負うこと。特に悪い結果をまねいたとき, その損失などの責めを負うこと。③法律上の不利益または制裁を負わされること。……④……債務に対する語……。」。『新明解国語辞典』(三省堂, 昭49)も『広辞苑』(岩波書店, 昭55)も大体似たような理解をしている。
- (14) 今道友信『東西の哲学』(TBS ブリタニカ, 1981)。
- (15) 同上の第8節「西洋に於ける責任」中の p. 228参照。
- (16) 同上 p. 234参照。
- (17) 「responsibility ①責任・義務・義理 (obligation) ②責任・義務・負担・重荷 (duty, charge) ③義務履行能力・支払能力 (ability to pay).」(『新英話大辞典』研究社, 1979)。
- (18) 「責めは動詞責むの名詞形。①責めること。とがめ。②責任」(中田祝夫『古語大辞典』小学館, 昭58, p. 920参照。)本文中の例文は〈平家・10・戒文〉よりのもの。
- (19) 下中邦彦編『哲学事典』(平凡社, 1982) p. 829参照。
- (20) 「……e insisten en que para ser responsables los actos deben ser espontáneos y no automáticos.」(Ferrater Mora, José『Diccionario de filosofía』Madrid : Alianza, c1979, p. 2852参照)。
- (21) 今道友信『東西の哲学』(TBSブリタニカ, 1981)の第7節「人格と責任」中の p. 227参照。
- (22) 『The Century Dictionary, Volume IV』(Reprint Edition, 1983 by Meicho-Fukyukai, Tokyo.)
- (23) 『SHOGAKUKAN RANDOM HOUSE ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY VOLUME Ⅲ』(昭54) p. 667参照。
- (24) 金子武蔵編『新倫理学事典』(弘文堂, 昭59)の「4)責任性」の項(p. 269)参照。
「責任は responsibility, Verantwortung として『応答』である。相対的責任が社会あるいはその規範に対する応答であるのに対して, 絶対的責任は自己の本来性に対する応答である。」
- (25) カール・ラーナー『キリスト教とは何か』(エンデルレ, 昭56) p. 38参照。
- (26) 日本倫理学会編『技術と倫理』(以文社, 1985) p. 202～p. 203参照。
- (27) 同上 p. 203参照。
- (28) 『Ethica Nicomachea (ニコマコス倫理学)』はアリストテレスAristotelēs (384-322B. C.)の倫理学上の主著で, 人間の行為の最終目的, および, その実現の方策を論じている。
- (29) 「……la gran mayoría de los filósofos está de acuerdo en que el fundamento de la responsabilidad es la libertad de la voluntad.」(『Diccionario de filosofía』Madrid ; Alianza, c1979, p. 2852 参照。)
- (30) カール・ラーナー『キリスト教とは何か』(エンデルレ, 昭56) p. 44参照。
- (31) 同上 p. 49参照。
- (32) 同上 p. 124参照。
- (33) 同上 p. 125参照。
- (34) マルセル著作集8『人間の尊厳』(春秋社, 1973)中の「第五講 存在論的秘義」(p. 121～p. 138)。
- (35) 同上 p. 133参照。
- (36) マルセル著作集8『人間の尊厳』(春秋社, 1973)中の「第八講 兄弟愛と自由」(p. 180～p. 197)。

- (37) 同上 p. 190参照。
- (38) 同上 p. 196参照。
- (39) 同上 p. 196参照。
- (40) 日本倫理学会編『技術と倫理』（以文社，1985）p. 204参照。
- (41) 註2)と同じ。
- (42) カール・ラーナー『キリスト教とは何か』（エンデルレ，昭56）p. 105 参照。清水宏子「道徳教育と人格の尊厳」（『人間学紀要 第14号』上智大学人間学会，1984，p. 86～p. 108）p. 89 参照。
- (43) 神が自分と自分の意志を人間に伝える（啓示）に当って，超自然的恩恵により，特別にすぐれた方法で神は自分の姿を明らかに示した。聖書はこの形の伝達を「神のことば」と呼び，神が人間に語りかけると言っている。次註，「ヘブライ人への手紙」参照。
- (44) 『新約聖書』ヘブライ人への手紙 1の1～3参照。
- (45) 同上 ヨハネの第一の手紙 4の8～9参照。
- (46) 『旧約聖書』申命記 6の5，『新約聖書』マタイによる福音書 22の36～38参照。
- (47) 『新約聖書』マタイによる福音書 12の1～8参照。
- (48) 同上 マタイによる福音書 7の12。
- (49) 同上 コリント人への手紙 13の13。
- (50) 「形式的・絶対主義的倫理への反抗とプラグマティックで実存主義的かつ功利主義的な立場から，個別的・具体的な状況における個別的自己の個別的で柔軟な生き方の優位を主張する立場」。（金子武蔵編『新倫理学事典』による。）
- (51) “キリスト者の自由”を指している。キリストによって完全かつ決定的にもたらされた自由で，信仰と愛をもってキリストに帰依するすべての人が享受しうるものである。
- (52) 『新約聖書』ヨハネによる福音書 15の12，17，同 13の34参照。
- (53) カール・ラーナー『キリスト教とは何か』（エンデルレ，昭56）p. 124参照。
- (54) マルセル著作集8『人間の尊厳』（春秋社，1973）中の「第八講 兄弟愛と自由」p. 191参照。
- (55) 『新約聖書』ローマ人への手紙 8の35～39参照。
- (56) 『旧約聖書』詩編 145の8，9参照。
- (57) 回心(metanoia)とは精神の根本的変化を意味し，人間の弱さから悪におちいった者が神の恩恵の助けによって，真心から真実に神に立ち帰ることを意味する。
- (58) カール・ラーナーは，人間を，“絶対的な超越的存在（すなわち神）に向かって超越することをその本質とする存在者」としてとらえている。
- (59) マルセル著作集8『人間の尊厳』（春秋社，1973）中の「第八講 兄弟愛と自由」p. 190参照。
- (60) 日本倫理学会編『技術と倫理』（以文社，1985）p. 202参照。
- (61) 1965年，当時パリ大学教授のロベール・ガリックが「ガブリエル・マルセルの普遍性」と題して記したなかに，次のように言っている。「…全面的に恢復され，照らし出された人間における真の探求は，必ず神を志向するものであることを，われわれに感じさせるのである。」（マルセル著作集8『人間の尊厳』中のp. 288より。）
- (62) 日本倫理学会編『技術と倫理』（以文社，1985）p. 2参照。
- (63) 註4)，註5)参照。
- (64) マルセル著作集8『人間の尊厳』（春秋社，1973）中の「第五講 存在論的秘義」の一節，p. 132参照。
- (65) 清水宏子「道徳教育と人格の尊厳」（『人間学紀要 第14号』上智大学人間学会，1984）p. 102～p. 103参照。

- (66) マルセル著作集 8 『人間の尊厳』（春秋社，1973）中の「第九講 危機に瀕する完全性」の一節，
p. 214参照。